

『水
仙』

柴
野
千
栄
雄

「劇中、渚の唄う歌」

下記御詠歌の詞を分割し、アレンジした左の曲にて唄い継がれていく。中ほどの詞は端折ってもよいが、最初と最後の詞は舞台と符合していなければならぬ。

The image shows a musical score for three staves. The first staff is in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 4/4 time signature. The tempo/mood is marked 'Al. S.'. The lyrics under the first staff are 'こはは このよの ことばらす -'. The second staff continues the melody. The third staff is in treble clef with a key signature of one sharp and a 4/4 time signature, marked 'D. S.'. The lyrics under the third staff are 'あり - が - た - ぞ -'.

賽院河原地蔵和讃

これは此世の事ならず、死出の山路の 裾なる賽の河原の

物語 聞くにつけても 憐なり、二つや三つや四つ五つ、

十にも足らぬ 嬰兒が、賽の河原に集りて、父戀し母戀し、

戀し戀しと泣く聲は 現世の聲とは事變り、悲しさ

ほねみ とお なり 彼の 嬰兒の所作として、河原の石を取

り集め、是にて回向の塔を組む 一重組んでは父の為、

二重組んでは母の為、三重組んでは古里の、兄弟我身と

回向して、晝は一人で遊べ共、日も入相の其頃は、

地獄の鬼が現れて、やれ汝等は何をする、娑婆に残りし

父母は、追善作善の勤めなく、只明暮の歎には、惨

や悲しや不慙やと、親の歎きは汝等が、苦患を受くる

種となる、我を恨むる事勿れと、黒鐵の棒をのべ、積

みたる塔を崩す、其時能化の地藏尊、動き出させ

給いつつ、汝等命短かくて、冥途の旅に来る也、

娑婆と冥途は程遠し、我を冥途の父母と、思うて明暮頼

めよと、幼きものを御衣の、裳の内に掻き入れて、慙

れみ給うぞ有難き、未だ歩まぬ 嬰兒を、錫杖の

柄に取附せ、忍辱慈悲の御膚に、抱きかかえて撫

擦り、憐み給うぞ有難き

幕はすでに上がっている。

暗黒。

舞台中央に「式台」が据えてあり、両側には幾つかの床机、四隅には細竹が立てられ、それに注連縄が張りめぐらされている。

本舞台両袖には、箒が置かれている。

遠く太鼓が鳴ると、松明を持った男が出てきて箒に火をいれる。

本舞台奥、薄明りの中に神社本殿が浮ぶ。

つまり神社境内に於て薪能を模して芝居が演ぜられる訳である。

登場人物が出てきて、それぞれ式台両脇の床机に座る。やがてこれらの人物たちは劇中死亡するに従い消えていく。

荒波の音、乞食姿の盲目の琵琶法師が現れる。

静かに琵琶を奏で語り始める。

琵琶法師

南無幽霊成正覚 出離生死頓証菩提

南無幽霊成正覚 出離生死頓証菩提

火宅の苦しみに身を焦がす兄妹よ。……火焰ひと群飛び覆い、やがてそれが地獄の鬼となり、鞭を振るって追い立てて来る。前は海、後は火焰、水責め火責めの苦しみに追い詰められ、逃げる事もかなわず、火宅の柱に取りすがれば柱もたちまち火焰となつて、耐え難き熱さに五体は焼けただれ黒煙となる。

而じてその苦患を過ぎて起き上がれば、鬼共は再び鞭を振るって追いたてて来る。

よろめき出でれば、身を裂き骨を砕き、熱鉄の繩にて縛り上げ、針山に追い上げ、

叫喚、大叫喚、炎熱、酷熱、無限の底に真逆様に落ち込む八大地獄の苦しみ……

種々諸悪趣地獄鬼畜生 生老病死苦似漸悉令滅

種々諸悪趣地獄鬼畜生 生老病死苦似漸悉令滅

舞台の一点に一輪の水仙が浮かび上がる。

琵琶法師

……やがて鬼も去り、火焰も消えて、暗闇となりたる中を苦患の隙かと再び火宅に戻りゆくその足元に、大焦熱の煙の中に晴れ間を見る如く、一輪の花。その花の香りに触れ、兄妹はいかばかりか苦しみが癒されよう。

見えるがごとく静かに近寄ると、彼はその花を手折る。

琵琶法師

われも又、過去の罪業を背負うて火宅に生きるこの世の亡者……。吹雪と潮風にさらされ、地獄の鳥羽口に咲くこの花にどれ程心癒された事か……。

過去を手繰り寄せるような笛の音が聞こえてくる

琵琶法師 ……悪業の限りをつくしてきたわしは、ここで始めてこの花を手折った。未だこの丘の上に幾群れかが咲いているだけではあつたが、荒んだわしの目にもこの世とは思えぬ極楽浄土に見えた。……あれ以来、諸国をさすらい幾歳過ぎた事か……。

笛の音に誘われるように琵琶法師は静かに舞台を半周する。

その動きに乗って舞台は明るくなってくる。

琵琶法師は権三に変わり、佐源太がそこに並ぶ。

第一景

早春、波の音。

荒海を眼下に見下ろす村はずれのわずかな畑地（客席を海と想定する）

そこ、ここに水仙の花が群れ咲いている。

佐源太とその手下の権三。佐源太は鎧を、権三は胸当てを付けているがいずれも無頼の風体。

海を見ている佐源太。

佐源太 暗いのお、この海は暗い。海も空もどんよりと沈んでおるわ。

権三 へえー、ここが頭の在ですかい。

佐源太 村を出て十年、早いものじゃ。

権三、手にしている水仙をもてあそびながら

権三 結構いいところではねえですかい。わしら帰りたくても帰る所のねえ者に比べりや、頭のように帰る在のある者は果報者ですぜ。

佐源太 ならば又シもここを我が在所として住むがよいわ。

権三 なんの。あつしや海にあつての権三様よ。こんな所でこせこせと生きてはゆけんわ。

佐源太 では、なぜこんな所までついてきた。

権三 頭をつれて帰る為よ。どんな仏心が出てきたのか知れねえが、頭は音に聞こえた海賊菫丸。陸に上つてしもうてどうなると言うんですかい。

佐源太 昔に戻つて、田や畑を耕して……。

権三 頭。……日の本を始め高麗、宋、遠くはシヤム迄も股に掛けて、海を荒らしてまわつた菫丸の頭が、今更こんな所で漁をしたり田や畑を耕して何となる。

佐源太 ……。

権三 行く先々での乱暴狼藉、悪業の限りを尽くしてきた今となつては悔い改めようもないわ

佐源太 ……。
権三 ……頭、宋の国で殺めたあの婆さんは一体何者ですえ。あれ以来頭は…
佐源太 いうな!

一瞬の沈黙。と、何処からか歌声が近付いてくる。

渚 ♪…これは此世の事ならず、死出の山路の裾なる、賽の河原の物語。聞くにつけても憐れなり…。

二人は物陰に隠れる。

村の娘渚が出てくる。周囲に誰もいないのを確かめると、ふたたび唄いながら、水仙の花を摘み始める。

暫くして麗花が出てきてその様子を見ているが、やがてたどたどしい日本語で話しかける。

麗花 渚さん。

渚 麗花様。

物陰の二人、様子を伺っている

権三 頭、あの女は何者ですえ、この村の者とは思えねえが…。

麗花 そなた、いつもここ来て、その歌唄ってる。どして。

渚 ……。

権三 ありや異国の、あの風体を見ると宋の国の女ですえ。

麗花 (口ずさむ) 悲しい歌、ここ来てそなたの歌聞くと、海に向こうの私の生れた国想う

渚 この歌は死んだ母に教わりました。

麗花 死んだ母。

渚 母はいつも畑仕事の傍ら、唄いながらここでこの花を育てておりました。時たま手を休めては麗花様のように海の遠くを見ておりました。私は母と一緒に、この花を育ててきたのです。

麗花 私の家にもこの花沢山咲いてる。そなたと同じ、私母と一緒にこの花育てた。

渚 麗花様。

麗花 そなたと同じ、私の母もう居ない。

渚 ……。

麗花 まるで私の国居るよう、水仙沢山咲いて。

渚 スイセン?

麗花 私の国、春来ると水仙咲く。

渚 この花は水仙というのですか。

麗花 水の中の仙人「水仙」。

渚 水仙……。

麗花 天に在る仙人「天仙」、地に在る「地仙」、そして水に在る「水仙」。

渚 水の中の仙人……、水仙。

麗花 渚さん、今日水仙沢山摘む。そなたと私の母この花供える。

渚 なりませぬ。

麗花 え？

渚 この花は呪われた花、……地獄花です。

麗花 ……水仙地獄花？

渚 村の者みんながそう申して嫌うております。

麗花 では渚さん、なぜ地獄花大切に育てる。

渚 これは父が母に残していったもの。そして、母が私に残していったものなのです。呪われた生まれのわたしに相応しいもの……。

麗花 渚さん、この花呪われてない。地獄花でない。これ、浄土の花。人間に尊い卑しいの別ない。母いつも言っていた。悪業重ねる者罪悔い信心深く生きるなら、人全て平等。そなた何故呪われた生まれ。ちがう、そなた、私、同じ人間の子供、何の違
いあるか。

渚 麗花様……、

権三の目は麗花に釘付けとなっている。

権三 この世の者とは思えぬいい女だ。まるで観音菩薩ですぜ。

権三出て行くとするが、そこへ佐平次がくる。

彼は渚が麗花と一緒に居るのを見て激しく罵る。

佐平次 渚、ヌシは何をしておる。

渚 あ、

佐平次 まだ仕事は残っていないよう。目を離すとすぐに忘れおって

麗花 佐平次殿……。

佐平次 行け。

怯え、逃げるように去っていく渚。

佐平次 矢張りここだったのか。姿が見えないと思うといつもここへ来て海を見ているな。

麗花 なぜ渚さんに辛くあたる。

佐平次 あれは、下賤の娘じゃ。

麗花 私、海の向こうから流れついた。渚さんと同じ境涯。

佐平次 じゃから、わしがそなたを国へ連れ帰ってやろうといっているのじゃ。何度言え
ばわかるのじゃ。

麗花 もう国には父母居ない。今帰ったとて。悲しみおぞましき蘇るだけ。

佐平次 国には未だ誰ぞが残ってしよう、その者達はきつとそなたの身を案じておるうに。
麗花 穏やかな村、いっぺんに地獄となった。男殺され女犯され何もかも奪い取られ焼
き払われた。

佐平次 なればこそ、生き残ったそなたは殺された者達の恨みを晴らさねばならぬ。

麗花 父と母殺め、村焼いた者、憎み……憎んだ。しかし、おなごのわたし何出来る。

佐平次 だからわしに加勢をしよう。そなたと共に宋へ渡り、そなたの村を襲い、父や母
を殺めた仇を共に打とう。

麗花 ……海賊襲った時、母私逃がしてくれた。仇討てとと逃がしたのでない。何処逃
げても慈悲深い人巡り会う事出来る。そこで生きてゆけと……。

佐平次 恨みを忘れて何の生きる事か、その母者の為にも仇を打たねばならぬと思わぬか。

麗花 母云った通り、私この浜、佐平次殿救われた。ほら、この村こんなに水仙の花咲
いて、生まれ育った村のよう、私国に戻ろうと思わぬ。

佐平次 これは地獄花、呪われた花じゃ。異国の海賊が災いと一緒に持って来た花じゃ。

麗花 海賊？

佐平次 十五、六年も前の事、この村にも海賊が襲うて来た。女、子供は山へ逃れ、男達
は戦うたが適うわけもなく、村長であつたわしの父をはじめ多くの者が殺された。

麗花 むごい……。

佐平次 男が殺され、若い女は連れ去られて行った……

麗花 ……。

佐平次 海賊が立ち去ったあと、年が明けて村に見た事もないこの花が咲いたのじゃ。

麗花 殺された人達の魂蘇った。

佐平次 そして花の咲いた家の娘が海賊の落し子を生んだのじゃ。

麗花 ……。

と、不適な笑みを浮かべ権三が近寄ってくる。

佐平次は麗花を庇いながら

権三 へへへ……

佐平次 何者じゃ。

権三 よう、観音様を口説こうつてのかい。

権三、麗花に襲いかかろうとする。

佐平次、権三に立ち向かおうとするが、軽くあしらわれ倒されてしまう。

権三は無造作に麗花の腕を掴むと引き寄せる。と、一瞬のうちに権三は麗花
に投げ飛ばされてしまう。

権三 畜生、わしを誰様と思うてやがる！

飛び起きると権三は刀を引き抜き、今にも飛びかかろうと構える。
しかし麗花には切り込んでいけない。

麗花はかなりの武術を心得ている様子が窺える。佐平次も隙を見て組みかかろうと身構える。

その中に佐源太が割って入る。

新たな敵と油断なく構える麗花と佐平次。

麗花を見据える佐源太。彼は麗花から目を離さずに

佐源太 佐平次、久しいの。

佐平次 ん？

佐源太 解らぬか、わしじゃ、佐源太じゃ。

佐平次 佐源太？

思いがけない言葉に驚き、佐源太を見つめる佐平次。

佐平次 兄者、……ほんに兄者ではないか。

佐源太 ……。

佐平次 よう無事で帰って来たの。倭寇わこに混って異国を廻っているとは聞いたが……、して兄者、仇は？

佐源太 この女は？

佐平次 ……去年の暮れ、浜に流れついた異国の女じゃ。

麗花 私、麗花。

佐源太 麗花？ 国は、……高麗か、

麗花 私、宋の国。

佐源太 宋の国……。

佐平次 兄者、仇は、討ったのか。

佐源太 ……。

権三 見事に打ち果たしたぜ。

佐平次 そうか、それで帰って来たのか。して母の行方は知れたか？

佐源太 佐平次……。（初めて佐平次を見つめる）

佐平次 ん、

佐源太 ……暫くやつかいになる。

油断なく見据えている麗花を見やり去ってゆく佐源太。

佐平次 兄者。

突き離すような兄の態度に戸惑いつつ後を追う佐平次。

とり残された権三は麗花から逃れるようにして佐源太を追ってゆく。

一人残る麗花。

麗花 佐源太……。へ中国語ちゆうごくごの人はなぜ、あのような眼をしているのだろう。憎い

仇を討って来たというのなら、もっと晴れやかにしているだろうに。あの暗く沈んだ眼、へ中国語||そして、私の心をこんなにとらえるものは何なのだろう。…私をこんなに不安にさせるもの、一体何…。

波の音だけを残し、溶暗

第 二 景

暗黒の中、激しく奏でられる琵琶の音。

火の手が上がる。その炎の中に、この家の主と見える老人が菩薩像を拜んでいるのが窺える。

宋の国のある村。海賊の襲撃を受け、騒然とした様子。

そこへ抜き身の刀を持った佐源太が踏み込んでくる。

佐源太 龍玄りゅうげん、ヌシは龍玄であろう。

静かに佐源太を振り仰ぐ老人

佐源太 龍玄、ヌシのために父を殺され、母を奪われた恨み、今こそ晴らしてくれるわ。

龍 玄 へ中国語||そこもとは

佐源太 日の本は越前居倉いくらの長、平左衛門がいっし一子、佐源太。憶えたか。

云うなり斬りつける。

老人は抵抗する事なく、その場に崩れる。

そこへ女が飛び込んで来る。

女 へ中国語||お前様、お前様

老人にすがりつく女。と、女は佐源太を仰ぎ見る。佐源太はその女も斬り捨てる。

女は佐源太に何をか叫びながら老人に覆いかぶさるように頼れる。女を窺い立ちすくむ佐源太。

そこへ権三が飛び込んでくる。彼は目ざとく部屋を物色すると菩薩像を見つけ、それを鷲掴むと、

権 三 頭、火の手が廻ってきやしたぜ、早う逃げださねえと、

権三逃げ去ろうとするが、佐源太はなおも立ちすくんで居る。
権三が叫ぶ。

権三 頭、頭、頭……

大きく火の手が上がる。権三の声が悲痛に響く、
激しく奏でられる琵琶の音。と、一瞬の暗闇と静寂。
権三の声と共に溶明。

権三 頭、頭、頭……

舞台は一景と同じ海を望む断崖の上。
麗らかな陽気に眠り込んでいた佐源太を揺り起こしている権三。

権三 どうしたのじゃ、頭。

佐源太 ……夢か。

権三 ははは……、茜丸の頭が夢を見てうなされるとはの。ははは……、

佐源太 ……

権三 殺めた亡者どもの恨み辛みが襲うて来るといのか。ははは……、その名を聞い
ただけで誰もが震え上がったという、あの龍玄を討ち果たした頭とも思えぬ不甲斐
なさじゃ。

佐源太 ……何度夢に見ることか。

権三 気の弱いことを。頭、一体どうしたのじゃ、だらしないぞ。頭は仇を討つため
に海に出たのじゃから、仇を仕留めたからには、もう海には戻らん。そう言うつも
りか。ははは……、これからこの村で漁師として生きていくか。

佐源太 今更、この様なうらぶれた所に居たとてどうなるものか。

権三 そうじゃ、それでこそ茜丸の頭じゃ。

佐源太 小癪な

権三 はははは……

権三の笑い声も力なく消える。気を取り直して権三もその場に寝転がる。
渚が出てくる。二人に気づいて一瞬いぶかるが畑の土起しを始める。
しばらく渚を見ている権三。

権三 渚、何をしておる。

渚 (怯えつつ) 土を起しております。

権三 こんな所の土を起してどうする。

渚 ……種を蒔きます。

権三 種を蒔いて実りがあるのか。

渚 はい。

権三は暫し渚の動作を見つめているが

権三 ……わしも小さい頃には畑仕事をようやらされたもんじゃ。

渚 権三さんが。

権三 ……わしも下賤の生まれじゃ。父や母は毎日きつい仕事をさせられておったわ。

渚 ……。

権三 村の者からはいたぶられての。わしはそんな父や母が嫌での、そんなオドオド生きてるのが嫌で村を飛び出したわ。

渚 ……男はいい、何処へ行っても自分の力で生きてゆく事が出来るもの。じゃが女はどんなにいたぶられても辛抱して生きてゆかねばならん。

意固地に土起こしを続ける渚

権三 ……木曾の義仲様が都へ攻め登られる時、わしは軍勢に紛れ込んで戦に出たが、散々な目に逢うてのう、倭寇わこに拾われてからは海賊じゃ。散々悪事を重ねて来たわ。……どれ、貸してみい

権三は渚の鋏を取り上げると代わって土起こしを始める

権三 死んでからは地獄じゃの。

渚 麗花様が申しておられました。どのような生まれの者であれ、仏様にお祈りすれば人はみな救われると。

権三 下賤の者もか。

渚 はい。

権三 罪もない者を殺め、乱暴狼藉を好き放題に繰り返して来たこのわしでも救われるというのか。

渚 犯してきた罪を悔い改め、一心にお祈りさえすればきっと仏様は救うて下さると。

権三 ははは…、仏が救うてくれるのは、仏のために寺を建立した者とか、仰山の金銀を寄進した者とかに決まっているのじゃ。昔から仏法というものは公家貴族のものよ。わしら下賤の者には関わりのないものじゃ。第一その日その日をやつと生きてる者に拜む仏なんぞありやせんわ。

渚 ……

権三 下賤の者はどのように生きてとて救われる事はない、同んなじことじゃ、はは…。

渚 ……

権三 渚、お前は何処で仏様を拜むのじゃ、下賤の者は寺へ行っても入れてはくれまい。さみしく押し黙ってしまう渚。権三声を落とすと、

権三 ……渚、お前に仏様をやろう。

渚 え？

権三 海の向こうから奪うてきたものじゃが、わしのような者が持っていたとて何の役にも立ちやせん。

渚 権三さん、

権三 さん、どうせその内に叩き売ってしまうものじゃ。お前にやろう

渚 本当に……。

権三 どうじゃ、一緒に来んか。欲しければ仏様の他にも何かやってもよい。

渚 それでは早うに済ませてしまわねば……（種を蒔き始める）

権三 そんなもの、ほおっておけばいい、一緒に来い。

渚 もう少して済みます。権三さんも手伝うて下され。

種蒔きを続ける渚にせかされ再び土起こしを始める権三。素直に仕事を手伝う権三に驚き、微笑む渚。権三の動作は次第に軽やかになってくる。そこに麗花が現れる。

麗花 権三殿、畑の仕事出来たか。

渚 （恥ずかしげに）麗花様

麗花 渚さん、権三殿、からだ持て余してる。力仕事すべて手伝わせよ。

権三 何もわしをそのように牛や馬のように云わずとも。

麗花 ぶらぶらせずにそなたも畑仕事の合間、仏様お祈りする、さすれば今まで犯してきた悪行、きつと仏様許す。

権三 宋の国の仏様はわしら海賊でも救うて下さるのですかい。

麗花 私の父、若い頃海の荒くれ者。悪行かさねて居た。私朝晩仏様祈る穏やかな父しか知らない。信心深い母の心、父変えた。

佐源太 そなたの母が荒れた父の心を変えたというのか。

麗花 ……そう。

権三 どうじゃ渚これでいいじゃろ。猫の額ぬかみたいなものじゃ訳もないわ。さ、さ、渚、はい、権三さん。

渚、嬉しそうに頷く。気恥ずかしげに二人はそそくさと去っていく。二人と入れ違う形で佐源次が出てくる。佐源太と麗花を窺っている。遠く海を見つめている佐源太。打ち寄せる荒波の音。

佐源太 ……仇を討ちたいとは思わぬか。仇を憎いとは思わぬのか。

麗花 ……思わぬ事ない。

佐源太 ならば何故、佐平次と共に宋へ帰ろうとはせぬ。

麗花 憎う思わぬ事ない。しかし、仇討ってどうなる。討った者、討たれて残された者、残るは哀しみと新たな憎しみだけ……、でしょう。

佐源太 では、ここで暮らすつもりか。

麗花 私、仇討とうと思わぬ。この村で父母の菩提、弔うて暮らしていく。私、この村

親しい。

佐源太 そのようなものか。……わしもそなたや渚と同じように仏に祈ろうかの。

麗花 そうなされ。

佐源太 しかし罪深いものよの。同じ仏に祈るといっても、そなたは殺された父母の、わしは殺めた者たちの菩提を弔うのじゃから。……どんよりとしたあの空の下で荒れている海の中から、わしの殺めた者達の声が聞こえてくるわ。

麗花 佐源太殿。

佐源太 わしを呼んでいるのじゃ。

麗花 それ、気のせい。

佐源太 地獄花の咲いているここに、こうしていると、まさに地獄の入り口に居るような気分じゃ。

麗花 殺めた人の菩提、祈る。その内こころ晴れてくる。静かになる。

佐源太 如何に祈ったとて、救われはすまい。血塗られた仏では。

麗花 血塗られた仏？

と、二人を窺い見つめていた佐平次。

佐平次 ……恨みを晴らさずして、どうなるというのじゃ。平穏な暮らしを壊された恨みを晴らしたとて、何の仏法に背くことになろう。

麗花 佐平次

佐平次 兄者は、父母の仇、この村の者みんなの憎しみを晴すために村を出て行った。その仇龍玄を討ち果たしてきた兄者とも思えぬ言い草じゃの

佐源太 かつての龍玄ならばいざ知らず、老い果てた男を手に掛けたとて何の手柄になるうか。

佐平次 龍玄は手強い相手ではなかったというのか。

佐源太 手向かいはせなんだわ

佐平次 しかし？

佐源太 龍玄は菩薩に祈ったまま斬られた

佐平次 はははは……、老いたりや龍玄め。兄者に踏み込まれて足腰が立たんように成ってしもうたか

佐源太 そこへ女が飛び込んできた

佐平次 龍玄の女か。

佐源太 わしはその女も殺めた。女はわしの顔を仰ぎ見ると声を絞り叫んだ……。

佐平次 何というた。

佐源太 ……佐平次。

佐平次 はははは……、恨みつらみをわめいたか、それとも命乞いか。その断末の叫び声に兄者はうなされていっているのか。それで仏心が付いたというわけか。はははは……、

佐源太 佐平次、……その女はの。

佐平次 わしは仇を求めてこの村を出て行く兄者の姿に奮い立ったものじゃ。わしもいつか兄者の後を追うて海へ出ようと思うたわ。

佐源太 ……海へ出たとて所詮は海賊、荒くれ者となるだけじゃ。

佐平次 おおよ、このような所で漁をしたり、実りもない田畑にへばり付いて生きていても所詮は父のように海賊に襲われ殺されるくらいが定めというものじゃ。どうせ生きるのなら、大きな海へ乗り出し生きてみようよと、兄者も仇を求めて出て行ったのではなかったのか。

佐源太 荒くれ者が、海賊がどんなものか、主にはわかるまい。その果てがどのようなものであるのか。

佐平次 茜丸の頭が村に舞い戻って静かに生きていこうというのか。……信心深うの。

佐源太 佐平次。

去って行く佐平次を見送る二人。

麗花、佐源太を振り返り見つめる。

波の音、

溶暗。

第 三 景

場所は一景と同じ。

渚が唄いながら菩薩像を水仙の花で囲っている。

その歌声に惹かれるように麗花が、そして佐平次出てくる。

麗花 渚さん、その菩薩像……。

渚 権三さんに戴いた仏様です。ご覧下さい、水仙のお花の中で仏様が微笑んでおられます。

麗花 おお、それ良い。

渚 はい。さ、麗花様も拜んで下され。ほんに穏やかなお姿をした仏様でございます。

渚に促され、麗花菩薩の前にひざまずき拜む。

渚 権三さんが「これは奪うてきた物じゃが、このお姿に惹かれて手放すことが出来なかった」と、申しておりました。

麗花 ……。

渚 今まで悪行を重ねてきたという権三さん。でもこれからわたしが一生懸命にお祈りして参ります。このように穏やかな仏様ですもの、きっと権三さんの重ねてきた怨念を晴らしてお救い下さいますね

冷やかに見つめている佐平次。

麗花、菩薩を見入る。見覚えのあるような……、との思いに駆られ、なおも見つめる。

やがて、衝撃を受けたように。

麗花 これは……、へ中国語へこれは一体、どうしたことだろう。へ

渚 え？

麗花 へ中国語へそんなことが……へ これを、これを権三殿、何処で手に入れた。

渚 (麗花のあまりの動揺に驚き) 麗花様、どうなされました。

麗花 どこ、それは、どこ。

渚 私は聞いておりません。ただ、海の方こうからと……。

麗花 海の方こう……。高麗？ 海渡る船から奪うてきた？ それとも、……宋の国？

おお、へ中国語へいずれにしても、これは一体なんと言うことだろう。このように
ところで再びこの菩薩に巡り会おうとはへ ああ……。

渚 麗花様、麗花様。

佐平次 麗花。

絞り出すような声で喘ぎながら、その場に泣き崩れる麗花。

驚く佐平次と渚。

渚は麗花の肩に手を掛けようとするが出来ない。あわてて権三を呼ぶべく走り去る。

佐平次、麗花を抱き起こす。

佐平次 しつかりせい麗花。一体どうしたのじゃ。

麗花 佐平次殿(菩薩をしめす)

佐平次 これは……。

麗花 権三、渚にくれた。何処で手に入れた。

佐平次 ……何でも宋の国から奪うてきたものじゃそうな。

麗花 宋の国、おお、へ中国語へなんと言うこと。その様なことがへ……この像、わたしの父母、朝夕祈り捧げていた。

佐平次 なんとした

麗花 権三云うこと誠なら、佐源太殿、宋の国で殺めた者、わたしの老いた父と母。

佐平次 ……では、兄者が、そなたの父や母を殺めたというのか。

麗花 この菩薩像。……この菩薩像何よりの証拠。

佐平次 ……。

麗花 へ中国語へああ、父上、母上。国を遠く離れたこのようなところで再びこの仏に巡り会おうとは。これは父母の信心深い心を受け継げということか、それとも無惨に果てた口惜しさ恨みを晴らせという事か……。

佐平次 なれば、……そなたの仇と云うは、兄者であったのか

麗花 (動揺した眼で佐平次を見つめる) 佐平次殿。

佐平次 偽りは言わぬ。

そこへ渚と共に佐源太と権三が現れる

佐源太 麗花、何とした。

佐平次 兄者。

佐源太 ……。

佐平次 兄者、覚悟せい。

斬りかかる佐平次。身をかわす佐源太。

なおも斬りかかる佐平次の刀をかわしながら、

佐源太 佐平次何とした。狂うたか。訳を話せ、訳を。

佐平次 ええい、言うな。

再び斬りかかるが佐平次は佐源太に適う相手ではない。

転んだ佐平次に刀を突きつけて問いただす佐源太。

佐源太 さあ、訳を話せ。

麗花 そなたは私の村を襲うた海賊。そなたこそわたしの父や母を殺め村を焼きはろう
た憎い仇。

佐源太 なに……。麗花、今何というた。

佐平次、素早く起きあがりながら

佐平次 兄者は宋の国の村を襲い、そこで年老いた麗花の父母を殺めたであろう。

佐源太 ……されどそれが何をもって、わしが麗花の父母を殺めたというか。

麗花 そなたが奪うてきたというこの菩薩、この菩薩像こそがわたしの父や母、祈りを
捧げていたもの。

麗花の指し示す菩薩像を見る佐源太。

佐源太 な、なんと。おお……。

衝撃を受ける佐源太。その隙をみて佐平次は佐源太に斬りかかる。

佐源太 んー。

権三 頭。

権三、斬られた佐源太を抱き支える

佐平次 非業に殺された肉親の恨み、兄者として知らぬわけはあるまい。

再び斬りかかる佐平次。権三が素早く間に入り佐平次を切り捨てる。

佐源太 まて、権三。

のけぞる佐平次の刀が権三の眼を斬り払っていた。

佐平次 うわー。

権三 ー。

倒れる佐平次。刀を杖に必死に立ちつくす権三。

権三 あの爺さんは頭の仇。老いぼれてはいたが、昔この村を襲うたという海賊・龍玄であったのじゃ。なれば又シにとつても仇ではなかったのか。

佐源太 待てというに権三。これ以上、憎しみをつくってはならぬ。

権三 頭。

渚 権三さん

崩折れる権三を掻き抱く渚。

衝撃を受ける佐平次。

佐平次 ……菩薩を持っていたは、龍玄であったというか。

権三 おうよ、頭が仇を切り捨てたあと、わしがあの菩薩を奪うて逃げたのよ。

麗花 違う、父、龍玄違う。父、年老いた村の長人。おやじ

佐平次 昔、そなたの父は海の荒くれ者と言っていたではないか。

麗花 ……しかし父は

佐平次 そなたは…、われらの仇、龍玄の娘であったか。

佐源太 佐平次。

佐平次 麗花…。

佐平次息絶える。波の音。

麗花 ……違う、違う、父、龍玄違う。

頽れる麗花の前に権三が杖にした刀が立っている。

佐源太 違うてくれればよいが、まことその菩薩がそなたの父の物であるのなれば…、

そなたの父がわれらの仇であったとて…、わしはそなたの仇となろう。

麗花 あああ…

嘆く麗花、大きく菩薩の像を捧げ乍頹れる

佐源太 安らぎをもたらす菩薩の像が、わしに苦しみを与え、今また麗花には憎しみを芽生えさせるのか……。

麗花 ……かつては荒くれ者であったとて、日夜菩薩に己が罪を悔い、祈りを捧げる父を……、ましてや罪もない母までをも殺められたこの憎しみ、この恨みを晴らさずにおかれようか。……いざ。

菩薩像を捨て、目の前の刀を掴むと、麗花は佐源太に挑む。

静かに麗花の前に立つ佐源太。

怒りに燃えて、まさに斬りかからんとする麗花、

その時、権三を掻き抱く渚の唄う、絞り出すような声が聞こえる。

その声に麗花は立ちつくす。

佐源太 ……さあ、討たれよ、そなたの父を殺めたはこのわしじゃ。さあ、討つがいい。

渚の歌声に苦悶する麗花。

佐源太 何をしておる麗花。そなたの村を襲い、多くの者を殺め、略奪・狼藉の限りを尽くしてきた憎き仇を討つがいい。

麗花 あああ……。 (と、再び頹れる)

佐源太 ……燃えさかる屋敷の中に、一人菩薩を祈っておったそなたの父は、踏み込んできたわしを振り仰いだ。……その穏やかな顔にわしは斬りつけた。二つに割れた顔面からは、血しぶきが飛び散ったわ。

麗花 んんん……、

佐源太 そこへ女が……、そなたの母が走りくると、頹れるそなたの父を掻き抱きわしの顔を振り仰いだ。……わしは、……わしはそのど元深く刀を突き刺した。

権三 頭……

麗花 ええい！

聞くに堪えず麗花は、佐源太を斬り上げる

渚 あああ……

権三 頭……

佐源太 ……麗花

佐源太は、哀れ愛おしむ様に麗花を見つめながら倒れていく。

渚を振りほどき権三はまさぐりながら立ち上がる。

権三 麗花様……。あなた様は、あなた様は……。

麗花 罪もない母までも殺めた海賊茜丸。麗花、鬼となって憎しみ、晴らした。

権三 あなた様の母上は頭の顔を知っておられましたぞ……。

麗花 ……。

権三 母上様は、頭の顔を見上げられると、頭の名を叫ばれました。

麗花 何故……。

権三 佐源太、佐源太とな……。

麗花 何故、何故、母が佐源太の名を……。

権三 あなた様の母上はかつてこの村を襲うたという海賊、龍玄に連れ去られていった

頭や佐平次殿の母ごであったのじゃ

麗花 ああ……。

権三 ……なれば、頭や佐平次殿はあなた様の兄上となろう……。

麗花 おお……。

渚 麗花様！

麗花は悲痛な声で叫びながら去っていく。

麗花を飲み込むように高鳴る荒波の音。

後を追おうとする渚、立ちすくんで叫ぶ。

渚 あああ……。麗花様は海に飛び込まれてしまった。……荒波に沈んでしまわれた
……。

権三 おおお……。如何に末法の世とは言え、これほどに苛酷な定めがあるうか。仏は
何故にわれらを苦しめる。……死んだとて救いのあるう筈もなく、ただ地獄を彷徨
うばかり、残された者として、罪業を背負うてこの世の地獄を歩まねばならぬ（序景
の笛の音が聞こえてくる）われもまた、光あるうちは未だ心休まる事もあるうが、
盲しいた今となってはただ、過去の悪行だけが見えてくる……。

笛の音が聞こえる。舞台は次第に暗くなっていく。

静かに舞台を半周する権三。彼は序景の琵琶法師に戻る。

終 景

舞台には一面に水仙の花が群れ咲いている。波の音。

序景のままに琵琶法師がいる。手には一輪の水仙の花。

琵琶法師 あれ以来諸国をさすらい幾歳過ぎたことか。再び訪ねし、越の里。……打ち寄
せる荒波、降り積む雪、香りくる水仙の花……。

と、渚に似た村の娘が、唄いながら出てくる。乞食姿の琵琶法師にたじろぐが、やがて無心に水仙の花を摘み始める。
琵琶法師は暫しその歌声に聞き入っているが、やがて

琵琶法師 ちと、お訪ねしたい。

怖じける娘。

琵琶法師 旅の乞食じゃ。驚かずとも良い。……そなたはいつも、ここでその歌を唄うておるのか。

娘 はい。

琵琶法師 哀しい歌じゃの。誰に教わったのじゃ。

娘 死んだ母に教わりました

琵琶法師 死んだ母……。

娘 母は何時もの歌を唄いながら、ここで水仙を育てておりました。私は母と一緒に、ここでこの花を育ててきたのです。

琵琶法師 ……。

娘は再び唄いながら、水仙を摘み始める。

琵琶法師は娘の歌声とその姿に心奪われているが、やがて静かに去っていく。

舞台の床几には誰もいない。

娘は無心に花を摘んでいる。

娘 ♪……娑婆と冥途は程遠し、我を冥途の父母と想うて明暮れ頼めよと、幼きものを御衣の裳の内に掻き入れて慰み給うぞ有難き。未だ歩まぬ嬰兒を、錫杖の柄に取附かせ、忍辱慈悲の御膚に、抱きかかえて撫擦り、憐み給うぞ有難き。

波の音を残し、娘の姿を絞りながら舞台は静かに暗くなっていく。

了

〈上演記録〉

- ・ 86年11月2日 劇団たけぶえ第12回公演（於・武生）
- ・ 〃 11月9日 武生↓小浜・ふるさと交歓公演（於・小浜）
- ・ 87年3月14日 第25回全国アマチュア演劇研究大会（於・横浜）
- ・ 〃 7月26日 試演公演。行政、報道・演劇関係者を招いての批評会（於・武生）
- ・ 〃 8月16日 国際演劇祭参加記念・壮行公演（於・武生）

- ・ 〃 8月23日～28日 国際アマチュア演劇フェスティバル（オランダ・ユトレヒト）
- ・ 〃 8月28日～30日 西ドイツ・マンハイム外、友好三都市親善公演
- ・ 88年10月11日～13日 地域劇団東京演劇祭No.4（文化庁主催、於・東京、三ステージ）
- ・ 92年10月15日～18日 第2回武生国際地域演劇祭（於・武生）
- ・ 95年11月4日～5日 第10回国民文化祭・とちぎ95（於・栃木県矢板）
- ・ 〃 11月26日～27日 第3回武生国際地域演劇祭（於・武生）
- ・ 96年5月14日～23日 第3回リヴァプール国際演劇祭（カナダ・ノヴァスコシア）

ヘリヴァプール国際演劇祭・受賞

- ・ 『最優秀特別作品賞』『最優秀舞台技術賞』『最優秀主演女優賞（柴野文江）』
- ・ 『優秀演出賞（柴野千栄雄）』『優秀主演男優賞（山本裕一）』

この作品は私の所属している「劇団たけぶえ」が一九八七年にオランダのユトレヒトで開催された『国際アマチュア演劇フェスティバル』に参加するための作品として書かれたものである。素材としては、郷土の越前海岸に群生する「水仙」の、その渡来にまつわる「伝説」と、能の「求塚」に依っている。

今日までの上演回数は、地元での公演を始め内外の演劇祭参加など12公演で都合16回程のステージを数える。「劇団たけぶえ」の場合、大抵は1～2回、再演を含めても3～4回の上演で終わってしまう中で、この作品は上演回数が多いレパートリーである。この間、その都度の手直して作品は原型をとどめぬほどに変わってしまった。

オランダでの公演の後、作品がアマチュア演劇総合雑誌「アマチュア演劇」（87年11月号）に掲載されたこともあって名古屋市愛知工業高等学校演劇部によっても上演されている。さらに88年の東京公演の折には舞台を観た韓国の留学生が「帰国して韓国で上演したい」と申し込んできたが、これはその後どうなったのか音信が途絶えて分からずにいる。

舞台の成果はその折々に際しての条件によって出来不出来は、殊にアマチュア劇団では当然あるものだが、この作品の評価については面白いことに国内と海外とは大きくはつきりと異なっている。

「単なる因果応報の物語で、さしたるものとは言えない」「どう評すればよいのか理解に苦しむ」と突き放して切り捨てて一般的な国内での批評の反面、「ギリシャ悲劇を想わせる作品」「この作品に出会えた幸運に感謝したい」といった海外での面映ゆい論評である。

これらは多分に台詞の疎通の悪さや異国情緒などから来る思い入れの過ぎたものとして控えめに受け止めてはいるのだが、上演18カ国の参加劇団の中からケーススタディとして選ばれ、世界42カ国から集まった演劇人によるオランダでの討議。或いはカナダ・ノヴァスコシア州に於ける演劇コンクール「リヴァプール国際演劇祭」では四部門入賞の後、「最優秀作品賞」をめぐってブルガリアの劇団と激しく競い、最終的には特例として「最優秀特別作品賞」(BEST PRODUCTION～FIRST RUNNER UP)と云った設定外の賞を設けると云った処置が講じられ、その年の秋に実行委員長であり舞台芸術監督のエバ・ムーア女史が私たちの街・武生市に賞額を持参して下さるといふ異例の処置が与えられた。

観劇された人びとからの評価も、公演後のパーティの中、人混みを分けて握手を求めにきた老人が、静かに感謝の言葉と共に抱擁してくれた想い出。また打ち上げのパーティで踊りに興ずる女子学生の「渚の摘んでいる水仙の花は、非業に死んでいった庶民の魂。それを渚が鎮魂の唄と共に蘇らせている」との感想に、満更的の外れたものとも思えない気が持ちが湧いてもくる……。

ともあれこの作品を持って、世界に打って出ようとかつての若き日の志と、その折々に巡り逢った新しい友人や審査員、そして多くの観客から贈られた賛辞を想い出として、再びこの作品が貶められないよう、意気消沈・自信消失しないよう、以後この作品の上演を封じている。へ全リ演ホームページ「演劇会議」創作欄に作品を掲載するにあたって

(2014年8月)